

雑感（20年目の浦島太郎）

総務庁統計局統計基準部国際統計課長
伊藤孝雄

ここ数年、毎年のように夏場の気温が上がり、昨年はまた異常に暑さを感じる夏だったような気がします。一方で、例年以上に夏場の異常気象というか、集中豪雨の被害などが報道されました。

私は、昨年7月に総務庁統計局統計基準部の国際統計課長を拝命し、これを機会に何か寄稿をと依頼され、ここに着任ご挨拶を兼ねて一筆啓上させていただきますことにしました。

実は、私は、約22年半前（1977年）に大学を卒業して当時の行政管理庁（現総務庁）の行政監察局に奉職して以来、今年が勤続23年目になりますが、国際統計課は、就職2年目の1978年4月に係員として配属された課です。統計基準関係部局としてみれば、1994年4月から1年間統計審査官として勤務し、第10回の日本標準産業分類の改訂や1990年産業連関表の作成に携わって以来3回目の勤務ですが、同じ課に20年たって改めて配属されたのもいい機会と考え、着任後まだ数ヶ月ですが、昔の記憶をたどりながら、現在の業務について考えてみました。

今回、国際統計課に勤務することとなり改めてその業務全体を見ると、当然のことながらこの20年余の間においても、基本的に大きくは変わっていない面と一方で極めて大きく変わった面があります。

ここでは、その点についてご説明しつつ、当課

の業務についてふれ、統計関係業務に携わられる方々の御参考になればと思います。

まず、当課の基本的役割をかみ砕いて言うと、大きく次の2つに集約されますが、この点については、基本的な変化はありません。

- ① 世界に開かれた統計行政に関する我が国の窓口機関であること、
- ② また、統計に関する国際協力の一環として設立された国際機関（現在はE S C A Pの附属機関）であるアジア太平洋統計研修所（東京所在）に関する我が国（招請国）の担当機関であること

しかし、その具体的な業務内容やその処理方法等については、目をみはるほど大きく変化しています。

例えば、統計行政に関する我が国の窓口機関としての業務についてみると、具体的には、国連統計委員会、同統計部やその他の国際機関の統計関係部局、世界各国の統計部局、国際統計協会などとの間で様々なデータや情報交換を行うとともに、これら機関等への対応に当たって関係省庁との調整が必要な場合にはその総合調整も行っています（但し、個別の特定分野で、我が国の対応省庁が明確かつ限定されるものについては、関係省庁が対応。）が、大きな変化としては、一つには、現実に対応している国際機関が、当時は国連統計委

員会、同統計部やE S C A P統計委員会あるいはOECDが中心であったのに対して、現在ではIMFなどの他の国際機関やEUROSTAT（EU統計局）などと対象が拡大していること、また、国際機関等における各種の統計関係の会合も、様々な下部組織としての委員会やワーキンググループが組織されるとともに、国連統計委員会等の承認のもとに活動している各国の統計行政機関職員などの専門家からなる様々な非公式の研究グループなどにも拡大していることであり、そこで扱われる問題も、単に人口社会、消費者物価、産業活動や貿易などにかかる統計データの交換や国際比較性の向上の観点からの議論に限らず、金融、環境、情報通信、サービス、ジェンダー、貧困などの新たな問題分野にかかる統計の開発・収集などの多岐にわたり、関係省庁が協力してこれに当たる必要性のある事項が増大していることです。また、当課の活動は、先輩諸侯の努力の結果、広く世界に知れるところとなり、諸外国の統計行政機関はもとより外国の民間企業や大学生などからも情報提供を求められる例も増えており、これらの要望にもできるだけ丁寧に対応するように努めています。

ところで、この約20年間の通信情報機器等を始めとする事務機器の発展には目を見張るものがあります。1978年当時は、多くの書類は手書き又は英文タイプライター打ちでしたが、国際統計課には、当時最新式のIBMの電動タイプライター（なんと、ワープロじゃないのにタイプミスした活字の自動修正機能付き）があったのにとっても感動し

たものです。複写機は、湿式の青色複写機がある程度で、現在のようなコピー機器はもちろなく、通信手段としては、電話・電報のほかはファックスもなく、国際電話も経費が高いため、最も早い通信手段としてはエアーメールをつかい、急を要しないものについては船便を使っている時代でした。ところが、今や事務室には職員一人に一台のワープロ機能等の広範な機能をもつパソコンが置かれ、インターネットやE-mailで瞬時に膨大な情報のやり取りが行えるようになり、国際会議等のための下準備としての情報や意見の交換も、昔とは比較にならないほど頻繁かつ気軽に行われるようになりました。

最も、これらのことは、結果としてより広範な問題に対してよりスピーディに対応することが求められていることを意味しており、隔世の感がするとともに、その責任の重さを感じ、職員の皆さんの協力を得てより一層の努力をせねばと感じている次第です。

さて、この20年間に業務に必要な肝心の私の語学力は向上したのでしょうか。答は、事務機器の進歩ほどには向上せずであり不勉強を恥じるどころですが、英文和訳（和文英訳）の翻訳ソフトが助力してくれる場合もありますし、英文スペルチェッカーなどのソフトもありスペルミスによって恥を書く機会は大幅に減りましたので事務機器の進歩には感謝しているところです。しかし、最後は人と人のお付き合い、つたないながらも常に心を込めてと思っている今日このごろです。